

討した。対象は慢性期血行再建術を行った 5 例 (EC-IC bypass 3 例, CEA 2 例)。術前見られた低灌流域は BZR の保たれている部分と低下している部分とに分かれた。BZR の保たれている部分は血行再建術後に行った脳血流 SPECT 上血流が改善したが、保たれていない部分は改善しなかった。すなわち、術前に行った BZR による SPECT 画像は術後に行った脳血流 SPECT 画像に近似していた。 ^{123}I -Iomazenil は血流とは異なった虚血脳の情報を提供しており、血行再建の術前状態の評価に有用である。

ミニシンポジウム

『よりよい SPECT 画像の作り方, 読み方』

司会：玉木 長良（北大核医学）

佐藤 順一（旭川医大放射線部）

演者：撮影の面から 太田 洋一

（帯広厚生病院放射線技術部門）

再構成の面から 久保 直樹

（北大医療技術短大）

放射線科の立場から 宮崎知保子

（市立札幌病院中央放射線部）

循環器内科の立場から 中田 智明

（札幌医大第二内科）

脳外科の立場から 中川原讓二

（中村記念病院脳外科）

回転型ガンマカメラが登場して 10 年以上にもなり、今や SPECT による画像診断法はすっかり日常の核医学診療に定着した。最近では多検出器の SPECT 装置も登場し、より鮮明な SPECT 画像が得られるようになってきている。この北海道においても数施設で稼働しており、今後の普及が期待されている。この機会に画像を作成する技術者とそれを読影する放射線科医、さらにはそれらを臨床に活かす専門分野の医師を交えて、よりよい SPECT 画像に関して討論の場を作る必要性が大きいと考えられる。このミニシンポジウムではこのような多方面の技師、医師を交えてよりよい SPECT 画像をどのように作成し、どのように読影して臨床に役立てて行くのかを討論したい。